

# 古彝文經典『生育經』と不妊治療

松岡 格

## The Scripture of Childbirth: the Nuosu's Way of Thinking about the Life

MATSUOKA Tadasu

### 彝族の言語・文字とピモ

彝族は、中国西南地域に暮らす、中国の少数民族の一つである。主に四川省、雲南省、貴州省を中心に約871万人<sup>1</sup>（2010年）の人口を擁している、比較的人口規模の大きな少数民族である。公的統計の人口は上記の通りだが、実際には現在の人口は900万人を超えられている。

チベット族やウイグル族のように、省と並ぶ民族自治「区」は擁していないが、彝族の民族名が冠されている自治州・自治県等は数多く存在する。特に雲南省の楚雄彝族自治州と、四川省の大涼山彝族自治州は彝族単独の民族名が冠されている、彝族の集住地区である。

彝族の話す言語は、チベット・ビルマ語派に属する彝語である。他の少数民族も独自の言語を持っていることが一般的である。しかし、民族の独自の文字、となるとそれを有している民族は一気に絞られることになる。彝族社会の特徴の一つは、独自の文字を持っていることである。

とは言っても、彝族の多くがその文字を理解していた、とは言えない。近代化以前の彝族社会において、むしろ人口のほとんどは、いわゆる非識字であったと考えられる。であるから「文字がある」と言っても、かつての彝族社会の中でその「彝文字」を理解できる者はごく一部の者に限られた。

では誰がその文字を理解できたのか。代表的なのが、「ピモ」と言われる、司祭である。ピモは、信仰とかかわる各種の儀礼をとり仕切る職能者である。かつて「奴隸制」とも言われた彝族の厳格な社会階層制度においても、文字を

---

1 中華人民共和国国家統計局 <http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm>  
(2017年11月5日アクセス)

解するピモは高い社会的地位にあった。現在でも儀礼を行うピモは多く存在している。彝族の家庭では、少なくとも一年に数回はピモに儀礼の実施を依頼することが一般的である。

### ピモと経典 彝文字の原（母）資料、古彝文経典

ではそのピモの解する文字がどこに書いてあるのかというと、ここで取り上げている「経典」である。

上記の彝族自治州の一つである大凉山彝族自治州の中心都市（州都）は、西昌という街である。同州は四川省の中心都市・成都から大きく離れた土地であり、州都の西昌も含めて大きく経済発展が遅れた場所である。しかし西昌に限っては近年、急速にかなり大きな都市へと発展している<sup>2</sup>。

その西昌のあるストリートには、ピモ達が集まるようになってきている。歴史的にピモの主な活動場所は山奥の、いわゆる農村であり、彼らが大都市までやってきている、ということ自体が、彝族社会の変化を示す現象の一つである。ここに滞在しているピモ達が主な業務としているのが、占いである。大都市で暮らす彝族達が、日々の生活で抱えた悩みについて相談をもちかけるために、このストリートに集まってくる。

占いというのは、本来ピモの行う業務の一つに過ぎない。周縁的業務と言ってもよいかもしれない。このような、都市に出て占いを専門に行うようなピモであっても、彝族の文字で書かれた経典を、常に携帯している。彼らの占いのよりどころになるのもこの経典である。



図1 経典に書かれた彝文字

---

2 中国西南地域の別荘地のうちの一つとなりつつあるようだ。

彝族のビモは、技術を修めれば誰でもなれる、というものではない。ビモの地位は、父子相伝を原則とする。ビモの家系ごとにその貴重な經典を受け継いできた。家ごとの經典記載方法・内容は異なる。前近代の状況においては、使う文字も統一されていなかった。ということは、(ビモ)家の数ほど文字がある、と言っても過言ではない。

このような状況にあった彝文字は、もしこのままであれば、上記のような大きな人口を擁する彝族の通用文字として機能することは難しかったであろう。その点から言って、戦後の中国においてこの彝文字の近代化が行われたことは、彝族社会にとって重要な歴史的役割を果たしたと考えられる(羅慶春・松岡格、2010)。

まず1970年代に文字の標準化が行われた。上記の通り、ビモの經典に記された文字は多種多様であり、仮に各ビモ家の使用した文字を全て数え上げたとしたら、かなりの種類にのぼると思われる。またビモの經典に記された文字は表意文字(表意単音節文字)であった。文字の近代化を行う過程で、この多種多様の文字から、819文字が選ばれ、各文字が一音節を表す表音文字(表音が主な役割となった音節文字)として使われるようになった。

例えば、後述する高山ツツジの花というのを彝語で表現すると、819文字のうちの3文字を使って「**𐄎𐄏𐄐**<sup>3</sup>」と表記する。アルファベットに直すと、「shuox<sup>4</sup> hma vie」となる。

標準化が行われた後の彝文字の発展は急速であった。少数民族の文字の発展としては驚異的、と言ってもよいだろう。というのも1980年代にはタイプ法が成立し、2000年代にはユニコードにも編入された。

ユニコードに収録されたマイノリティの文字は、ごくわずかであり、このことだけでも快挙と言ってよいだろう。

さらに現在、中国の携帯・スマホでも彝文字が打てるような状況になっている。また、マイクロソフトの標準文字セットとして組み込まれており、日本を含む世界各国において、いつでも使える状態になっている。

さきほどの例で言えば、Microsoft Windows上で「言語の追加」を行い「イ

3 意味記号のようにも見える見た目のこの彝文字は、上記のように表音文字として使われるようになってはいるわけであるが、中にはその文字が元々持っていた意味のままに使われることもある。例えばこの三文字の中では最後のこの𐄐という文字はもともと花という意味を表し、ここでも「花」という意味として用いられている。

4 このうちxは声調を表す記号である。

語（中国）<sup>5</sup>」の入力法を追加し、「shuox hma vie」と入力すれば、たちどころに「𐄎𐄎𐄎」<sup>6</sup>と彝文字が出てくる。

上記のように、文字近代化の過程では、その数多ある文字の中から800ほどの文字を選んで標準化・統一が行われた。音節文字の中で、この800字という字数はかなり多い。言語学的には、限界と言ってもよい規模のようだ。しかし、ピモ經典の中に記載されていた文字数からすれば、かなり数が絞られていると言える。

本稿では、これ以降、この標準化以前の、經典に書いてあるような彝文字を「古彝文」、標準化以後の文字を「現代彝語」と呼ぶことにする。

上記のように、ピモが古彝文で記録してきた經典は、彝族の民族伝統文化の核心部分と言ってもよい。一方で、他民族で見られるような口承文化がないわけではない。神話伝説は、文字を解さない、彝族の一般民衆の間で語り継がれてきた<sup>6</sup>。また同じように口承で引き継がれてきた歌謡も、現在に至るまで歌い継がれてきている。これらの神話伝説、歌謡等もちろん、貴重な彝族文化の一部である。

### ピモと經典の関係性

この古彝文經典は、他の民族・地域の例と比べても、かなり特徴的であると思われる。

まず、仏教の經典のように、經典を持ってそれを読んでいくものではない。仏教の僧侶の行う読經のポイントは、原文の内容に沿って、正確に読むことにあると思われる。彝族のピモにとって經典を原文通り読むことは同じように重要ではあるが、テキストを用いる状況が異なる。

逆に多くの少数民族、マイノリティの伝統社会は無文字社会であるから、儀礼も特に何らかの書かれたものを典拠に行われるということはなかった。儀礼をとり仕切る司祭（シャーマン）は、文字とは無縁の形で儀礼を実施する。言い換えれば、彼らにとって文字は重要なものとは言えない。祝詞・呪文は口頭で記憶するという例が多い。長々とした神話の内容などを、数日をかけて暗誦

---

5 マイクロソフトの仕様なのか、このような表記になっている。

6 口頭で伝えられてきた彝族の神話としてよく知られているものとして、創世神話『ノウォトイ』が知られている。ただし、このような重要な神話についてよく知っているのは、やはりピモである。つまり神話に関する知識も、ピモが握る知識のうちの一つとなっている。

するといった例もある。

彝族社会にも、スニ・モニと言われる（上記の他民族における）シャーマンのような存在がいる。スニは男性、モニは女性である。彼ら／彼女達はピモと違って、文字（古彝文）を解さない。

その意味で、スニ・モニの方が他の民族の司祭に似ている存在と言える。スニ・モニは古彝文經典ではなく、己の身体に憑依した神霊アサの力を借りて治療などを行う。

このスニ・モニの存在も、彝族社会にとって重要である。しかし彼ら／彼女達はピモが行うような、彝族社会において重要な役割を果たす儀礼を行うことができない。したがって社会階層制においてピモのような高い地位を与えられていなかった。

またモニは女性のシャーマンである。この文字を解さないシャーマンには女性の存在が認められているのである。男性のみに継承が認められ、何世代にもわたる知識の継承が重視されるピモとは対照的である。スニ・モニは、神霊を降ろすことができれば、誰でもなることができた。言い換えれば彼ら／彼女達は個人の能力でその地位を獲得することができたのである。

彝族のピモは、スニ・モニと違って、古彝文が読めなければならないし、經典に書いてあることを暗誦できなければならない。とは言っても、ピモは經典を見ながら儀礼を行うわけではない。また、經典の内容は単にテキスト通り詠唱すればよいというようなものではない。儀礼の具体的な状況に応じて、ピモが能動的に用いるものである。儀礼の場において古彝文經典自体が果たす役割は部分的なものに過ぎない。

こうしてみると、儀礼がどのように行われているのか、不思議に思える。というのも、ピモは文字を理解し、その記述内容にもとづいて儀礼を行っている。これに対して他の参加者は文字を理解しておらず、したがって經典の内容を把握しているわけではない。ピモと他の参加者は、どのような文脈を共有しているのだろうか。

儀礼の行われる場において、ピモ以外の参加者で經典の内容の詳細を把握している者はいない。しかし儀礼の概略やその進行は、依頼者の家族をはじめとした参加者も把握している。ピモやその助手は、必要に応じて口頭で参加者に指示を出す。また多く儀礼に参加したことがある年長者の中には、場合によってはピモよりも儀礼の進行を理解しているものもいるようである。しかし、そのような者であっても、經典に書かれたこと自体を理解しているわけではない。

## 古彝文經典『生育經』とは

現在中国ではこの古彝文經典の重要性が認識されており、すでに中国語に翻訳・出版されたものもある。例えば四川民族出版社は、160冊に及ぶ『彝文典籍集成』、20冊におよぶ『彝文典籍叢書』などを出版しており、同出版社内に彝文専門の出版センター（彝文出版中心）を成立させている。同社では現代彝文で書かれた国家法規や実用書、辞典類なども出版しているが、同時に上記の「典籍」関連シリーズでは、經典などの古彝文で書かれた原版をそのままの形で印刷・出版する試みを始めている。

ビモが継承してきた古彝文經典の中で特に有名なのが『指路經』であり、同社の出版物にも収録されている。『指路經』は葬送儀礼、つまり死の儀礼に関わる古彝文經典である。彝族社会における死者の葬送においては死者の魂を、家族の（伝説上の）移住ルートをさかのぼって送っていくということが必要となる。『指路經』は、この魂を送る方法を記した、重要な資料である。同じ『指路經』という名称の經典でも、地方によって異なるバージョン<sup>7</sup>が各地に保存されており、そのうちいくつかのバージョンがすでに出版されている。

古彝文經典の内容は様々であるが、その中で重要な分野となるのが呪術に関わるもので、呪い、呪い返しに関わる經典も多くある。ビモの經典は、その他、日本語で言うところの厄払い、各種祈願、占い、人生儀礼などの各種用途に用いられている。

一方で本稿において分析対象とする經典『生育經<sup>8</sup>』は、ほとんど注目されてこなかった。女性の不妊治療を行う儀礼の典拠となる經典なのであるが、学術的には極めて重要な資料であると考えられる。

まず、現在においてもこの經典の内容は彝族の不妊治療に用いられており、これによって治療を成功させてきたビモの実例——「症例」と呼んでもよいだろう——が多く存在していることである。いわゆる西洋的・科学的治療行為として比較はできないものの、治療実践として効果をあげていることは確かであり、注目される。おそらく精神治療的側面もあると思われる。

7 既述の通り、各ビモ家で保存されてきた古彝文經典の内容は異なっている。名称が同じであっても、究極的には、家ごとに異なるバージョンの經典が存在しているわけである。

8 生育を司る生育魂に関わる經典・儀礼は何種類か存在している。その中でここで『生育經』と称するのは、「グフィ・イツ」と呼ばれる、生育魂を呼び戻す儀礼に関わる經典である。馬林英は、この儀礼について「促育儀式」という名称を与えている（馬林英、1995：143-146）。



上記のような医療行為・精神治療的側面と切り離して考えることができないのが、文化実践としての側面である。他の少数民族の文化と同じく、彝族文化の継承は危機にさらされ続けている。彝族文化の核心であるピモ文化も危機にさらされている。そのような状況の中では特に、ピモ文化を「変わらぬ形で」継承することは、現実的ではない。元来伝統文化の継承とは、理想的・観念的なものであり、社会変化などに対応して柔軟に形をかえて引き継がれていくものであるはずである。

現代のピモの儀礼の実践が貴重な文化実践であることは間違いない。しかしここで注目したいのは、それだけでなく、そのような文化実践と治療的効果がつながっていると思われることである。つまり彝族独自の世界観が「治療」の側面と何らかの関わりを持っているのではないか。どのようなメカニズムでそのような効果が発揮されているのか、興味深い所である。

もう一つ注目されるのが、男性のピモが、不妊治療の領域まで踏み込んでいる点である。多くの伝統社会においては男／女の領域は画然と仕切られている場合が多い。狩りや重要な儀礼の場には女性が参加できない、機織りの場に男性は立ち入ってはいけない、といった境界線が引かれていることが多い。女性の身体や出産に関わる事柄に関しては女性の領域であり、通常であればなかなか男性が踏み込めない領域であると考えられる。その点から言ってこの彝族のピモの事例は注目される。

以上どの点も説明・解釈がなかなか難しい点であり、研究対象としては興味深い。

## 調査・研究の概要

筆者は2005年から彝族居住地域での現地調査を行っており、儀礼や花文化について、雲南省の彝族を中心に調査を行っていた。

その後四川省の彝族についても調査を始め、花文化の関連で『生育経』の内容に触れるようになった。そしてすでに中国で発表した論文においても『生育経』の内容に言及している（松岡、2011）。

それ以来、『生育経』については関心を持ち続けており、今回の国際共同研究を行うにあたって、その解説・紹介を主要課題の一つとして設定した。

国際共同研究においては、『生育経』の内容を古彝文から現代彝文に、そして中国語・日本語への訳出の完成を目指し、関連の調査を行った<sup>9</sup>。訳出、整理作業はまだ完成していないが、本学部の紀要などで内容を紹介していく予定

である。

本稿では、まず『生育経』の内容とこれに関わる儀礼のあり方について述べ、不妊治療という儀礼の目的との関係や、儀礼の文化実践としての側面、この儀礼の背後にある彝族の世界観などの点についての学術的検討を行う。

### 『生育経』の背景

『生育経』の内容を理解するためには、いくつかの前提知識が必要である。

まず彝族の靈魂観念に対する理解が必要である。彝族社会では人間の魂は複数あり、男性と女性<sup>10</sup>では種類が違っているとされる。女性に固有なのが、『生育経』で問題となる生育魂（グフィ）である（孟慧英、2003：76；蔡富蓮、2004：102など）。魂がいくつあるか、ということに関しては諸説ある（孟慧英、2003：75-76）。

二つ目の前提は男性中心社会であることである。彝族社会は多産を追究する社会であるが、特に男児の出生を強く求める社会である。各家の系譜も、男性の名のみが引き継がれていく、父子連名の系譜（父系リネージ）である。子孫（特に跡取り息子）が存在しないことは、観念的にも最も悪い事態と言ってよい。これは四川省大涼山に限定されず、雲南省の彝族にも共通している。多くの祭礼・儀礼にこの思想が浸透している（楊甫旺、2003；楊甫旺、2006など参照）。父子連名の系譜は口承で次世代に引き継がれており、彝族の男性は自分の家の系譜を十世代以上記憶しておくことを習わしにしてきた。

既述のように彝族の伝統社会は厳格な階層制度で知られるが、社会関係としてより重要なのが、父系の共通祖先を中心につながる氏族集団「家支」制度である。「家支」は無条件でお互いに助け合う範囲であり、外婚単位である。これに対して各人の「姓」に当たるものは大きな社会的機能を持たない。「姓」を同じくしても「家支」を同じくしない場合には、必ずしも親近感が生じる対象とならない。逆に同じ「家支」出身であることが判明すると、例えば酒席の場などで大いに盛り上がりやすくなる。

---

9 翻訳の中心となっていたのが、2017年2月10日の国際シンポジウムにおいて発言・登壇していただいたリーク・ダチュ（立克・達曲）氏である。また現役のピモとして『生育経』についての知識をご教示くださったのが、同じく登壇していただいたジーク・ズツォ（吉克・依楚）氏である。

10 彝族は万物において二項並立的に雌雄を認める汎雌雄観念を有している。男性と女性の魂を区別する考え方や雌雄観念が何らかの形でかかっているとされる。



## 『生育經』の流れ

本研究計画で訳出を試みている『生育經』（リーク・ダチュ氏による漢訳）にしたがってこの治療儀礼の流れを説明すれば、以下の通りである。

ビモはまず儀礼の場となる家を清め、家族成員の確認などの準備作業を行う。

準備作業終了後に行われるのは、生育魂の探索である。經典の内容に沿って、女性の身体から遊離してしまった生育魂を探すという作業が行われる。妖魔・悪霊などに連れ去れてしまったと思われるあらゆる場所、ヌムブグ（彝族発祥地）、深山、高山、湖、崖など、考えうるあらゆる場所を（儀礼の經典の流れの中で）探して回るのである。

生育魂の居場所を探し当てたら、次の段階に入る。生育魂を（感情に訴えかけて）説得し、（生育魂が付くべき）主人の家へと引き戻す（引き寄せ、呼び戻す）。引き戻すに当たっては、発祥の地（冥界のような表現がなされる）から家までのルート——つまり家族移住のルート——をたどりながら、順繰りに、魂をたぐりよせて行く。家族移住の地理的ルートは『指路經』でも用いられるがそれとは逆ルートである。

このような召喚作業が一段落ついたら、憑依降霊準備が行われる。家の内外に存在して生育魂が無事主人の身体に付着することを妨げる可能性のある多種の悪霊を払い、再び家の中の清めの儀式が行われる。家を守る各種神格への挨拶を済ませた後、生育魂付着の儀礼の段階に移行する。

この最終段階である生育魂憑依の段階で暗誦されるのが、次に紹介する「生育魂の起源」の經文である。これが終わった後に犠牲動物などのお供えをささげ、生育魂を家の祭壇に鎮座させる、そして身体と一体化させる。

以上が主要部分であるが、最後に占い、家神などの説得、祝酒など事後の儀礼が行われる。

## 生育魂の起源

上記の流れから言っても、『生育經』の中でこの「生育魂の起源」の部分が經典の核心であるように思われる。簡単に紹介すると、以下のようになる。

天上にあった神樹（グボ<sup>11</sup>）の花が咲き、実がなり、それが天上から幾層もの雲を突き抜けて、人界の四方へと散らばった。人の生育を司る生育魂以外に、動物、植物、そして万物の生育を司る神となった。

11 グボのグはグフィの略称

生育魂は山から（分裂して？）さらに下へと落ちていった。杉林に落ちた部分は獣類の、崖に落ちた部分は蜂の、河に落ちた部分は魚の、草原に落ちた部分は雀類の生育を司る生育魂となった。そして（儀礼が行われている）この家にまでたどりついた生育魂は、この女性の生育魂となった。

以上の「生育魂の起源」の内容は、拙論（松岡、2011）で紹介した、ジーク・ズツォ氏の保持する別のバージョン（の『生育経』）の内容とも重なる。また、細部の描写は異なるものの、蔡富蓮氏が紹介する生育魂と関わるピモの経典に関する内容とも一致する（蔡富蓮、2016：79）。

興味深いのは、他の文献にも似た内容が記載されていることである。例えば工藤隆の採録した創世神話ノウォトイの「人類の起源」章の冒頭でグボが登場する。雲を抜けて落ちてくるまでの表現は重なっている（工藤隆『四川省大涼山彝族創世神話調査記録』（大修館書店、2003：326-327）。他のバージョンの『ノウォトイ』にも共通する部分は記録されているようである。

もう一つ興味深いのは生育魂の能力の描写が行われているところがあるところである。生育魂が山頂に至った時、木々の花が咲き、実を結んだ（万物を孕ませ、出産を実現させる能力、再生産、複製）。この場面で多種の花が登場する<sup>12</sup>。

## 不妊の原因

もう一つ興味深いのが、彝族社会において、不妊の原因についての細かい把握・分析がなされているらしいことである。というのも、ピモは不妊の原因を幾通りかの場合分けして、説明・対処しているらしいのである。例えばピモ家の子孫で、訳者のリーク・ダチュ氏は以下の六つの場合に分けて<sup>13</sup>説明している。

1 何らかの原因（自分に関する要因、環境要因、妖魔悪霊等）で生育魂が身体から遊離し、どこかに囚われてしまっている。このような状況にある女性の

---

12 拙論で述べたように、花は出産する女性の隠喩となっている（松岡、2011：53）。象徴的には、生育魂と重ねて考えることができるだろう。『生育経』のこの部分では、高山ツツジ（シュオマ）も登場する。シュオマは、彝族にとって重要な花であり、ピモのジーク・ズツォ氏の『生育経』の中の既述に従えば、植物の中で最も天上に近い、高い位置づけにある植物であり、花である。

13 馬林英は、四つの場合に分けている（馬林英、1995：144）。説明内容も、ここに紹介するものと異なっている。

身体は、不妊状態に陥る。これはある程度、以降の説明にもなっている。

2 異性と正常ではない性行為を（頻繁に）行った結果、生育魂が宿主の身体から剥離し、その異性についてしまった。このような状況は、生育能力の減退や喪失を招く。

3 乱倫、女性が暴行を受けた場合、生育魂が強い衝撃を受けて身体から飛び去ってしまう。このような状況を放置すれば、一生不妊状態となる。

4 守護神との関係悪化が、身体の持ち主（宿主）と生育魂の関係を裂く。これにより、妊娠不能、胎児の夭折を招く。

5 穢れ：動物の死体に触れた、食べてはいけない動物を食べたことなどによって、穢れに感染して不妊状態となる。

6 悪霊にたたられる：自殺や非業の死をとげた場面を目撃してしまった、などの場合。

儀礼を行うビモは、例えばこのうちどのようなケースに当たるのかを判断し、その状況に応じて必要な措置を行ったのであろう。それによって儀礼の進行や経典の用い方も変わってくるはずである。

#### まとめ—推定とさらなる疑問

以上、紹介してきた『生育経』について文中で投げかけた疑問と、当面の考えを記せば、下記ようになる。

まず、何が「治療的側面」と「文化実践としての側面」をつなげているのだろうか。これについては世界観を想起、再想起させることに一つのポイントがあると思われる。

次に、不妊治療の領域までビモが踏み込んで行く要因は何だろうか。これについては出産、多産信仰の延長線上にあるのではないだろうか。子孫を生産することは伝統的彝族社会における最優先事項である。そのプレッシャーが、ビモにジェンダーの境界を越えるように促すのではないだろうか<sup>14</sup>。

そして、他の儀礼、経典、神話との重なり合いについては余分という判断もあり得る。現代の文章であれば、すでに他の文章で述べられている内容を紹介する意味は半減すると考えられる。しかし、古葬文文献間に認められる内容の

14 これに対して、民俗学者の蔡富蓮（西南民族大学彝学院教授）は、ビモは専門職であり、ジェンダーがクロスしていることは、問題とならない、矛盾しないとの見解を述べている。

重なりは、前近代の状況では自然であり、むしろ積極的に理解できないだろうか。言い換えれば、経典同士や関連の文献は相互に連結可能である。そのような連結されたネットワークが、彝族文化を支えている、という見方ができるのではないか。

しかし、下記の疑問については解決できないままである。生育魂は女性に固有の魂とされているが、この言い方で完全に解釈できるとは思えない。男性はグ（雄の生育魂）女性はフィ（雌の生育魂）という言い方もされており、実際の儀礼や経典の内容からすると、夫婦（特定の男女のペア）の間に宿るものという解釈ができそうだ。生育魂は、夫婦（正しいペア）の間の正常な性的関係を好んでいるらしい。そのような関係の下に安定して存在し、正常な機能を果たすという点も特徴的である。

リーク・ダチュ氏は、生育魂は結婚した夫婦に宿るものであるという見解を示している。未婚の男女の生育魂は非活性の状況にあるという解釈である。

これに対して民俗学者の蔡富蓮は、すでに紹介したように生育魂を女性固有の魂としており、生育魂に関わる儀礼には夫婦がともに参加するものの、儀礼は女性を主として進行すると指摘している（蔡富蓮、1998：59；2004：105）。

筆者は、こうしたそれぞれの解釈の間でどのように整合がとれるのか、まだ結論を出せていない（例えば：男性／女性で異なる生育魂という点と、夫婦に宿るという点がどう整合性がとれるのか）。今後はこうした点を含め、さらに『生育経』についての研究を進めていきたいと考えている。

謝辞：本論文は、本学国際共同研究「民族伝統文化と多言語教育の実践研究：中国少数民族彝族についての国際共同研究」の研究成果である。

## 参考文献

阿庫烏霧

2010 『神巫的祝呪』（中国戯劇出版社）

巴莫阿依

1994 『彝族祖灵信仰研究』（四川民族出版社）

蔡富蓮

1998 「凉山彝族的求子仪式」『民间文学论坛』1998年第3期：59-62

2004 「四川凉山彝族生育魂崇拜观念」『宗教学研究』2004年第4期：107-111

2016 「彝族毕摩文献中的生命孕育观研究」『云南师范大学学报（哲学社会科学版）』第48卷第3期：76-83

- 工藤隆  
2003 『四川省大涼山イ族創世神話調査記録』（大修館書店）
- 馬林英  
1995 『彝族婦女文化』（四川民族出版社）
- 松岡格  
2011 「彝族与高山杜鹃：论园艺文化以外的花文化」『民族学刊』2011年第5期第2卷：48-55
- 孟慧英  
2003 『彝族毕摩文化研究』（民族出版社）
- 楊甫旺  
2003 『彝族生殖文化论』（雲南民族出版社）  
2006 『彝族社会历史文化调查研究』（雲南大学出版社）
- 羅慶春・松岡格  
2010 「信息处理技术对彝语言文学发展的影响」（「文学と情報」第五回国際ワークショップ（於 台湾亚州大学）発表論文）

## 中国語要旨

### 毕摩经典《生育经》与彝族的世界观

我们对彝族的民族传统文化和多语言教育进行了两年的调查和研究。彝族的传统文化中特别注重的是毕摩经典。其中着重研究了生育经。我们发现它是提供一种彝族社会再生产的核心概念的**经典**。也可以认为，是非常具有彝族文化特征的特色**经典**。而且毕摩用它来进行的**仪式**是通过提供这种概念来**连结起治疗行为**和文化实践的。笔者认为《生育经》对彝族来说是很重要的一部**经典**，应该得到更多的**关注与研究**。

